

私は独りじゃない～キリストと出会った少女～

これは私の伯母チルの証です。

伯母チルは 1919 年、沖縄本島南部の町で生を受けました。当時チルの父親は町から山原（沖縄本島北部）まで木材を船で運搬する仕事をしており、従業員にもめぐまれこのまま順調に進むかと思われました。ところがある年、大きな台風が襲来したかと思うと船はあっと言う間に壊れ、父親は多額の借金を背負うことになったのです。

生活は困窮し、どうにもならなくなつた父親は借金の返済のためチルを裕福な木材問屋に身売りすることにしました。当時チルはわずか 8 歳。年端もいかないチルには借金だの、身売りだのといった事情を理解できるはずはありません。突然親元から離され、とてつもない寂しさを抱えながら慣れない仕事で失敗して叱られてばかりいました。そして一日の仕事が終わる夕暮れには浜辺に出て、対岸にある実家の方を見つめながらただ泣いていました。時には浜辺のチルの元に家の主人がやって来て「おまえは借金のかたに身売りされたのだからどんなに泣いても家には帰れない」と叱るものだからさらに涙が溢れてしまうでした。

ある日の夕方、いつものように浜辺に出て母恋しさに泣いていると、少し後ろの方に自分と同じ方向を見ながら泣いている男の人がいることに気がつきました。とても不思議なことにチルはその人が泣く姿を見て「あ、この人は私のために泣いているんだ」と直感したのです。そしてそれからしばらくの間チルとその男の人はお互い一言も言葉を交わすことなく、ただ黙って一緒に泣いていました。どれくらいの時間が経ったのでしょうか。ふと気づくとその人はいつの間にかいなくなっていました。

後にその話を聞いた姪の私が「その人は知っている人なの？ どんな顔だったの？」と尋ねたのですが、チルの返事は「いや、知らない人だった。あれから一生懸命その人の顔を思い出そうとするんだけどいつもぼんやりしてどうしても思い出せないんだよ」と言うのでした。しかし次の瞬間はっきりとした力強い口調でこう言ったのです「でもね、わん（私）のために泣いているその人を見た時、わんは思った。わんは独りではない、一緒に泣いてくれる人がいる。だからわんはそれ

からは泣くことはしなくなった」と。そして「もし苦しいことがあって独りで泣いている人がいたら、あなたは独りじゃない。一緒に泣いてくれる人がいるよと教えてあげなさい」。それがチルの教えでした。

私はこの話にとても衝撃を受けました。そしてあの浜辺で出会ったその人は確かにイエスキリストだったのだと確信しました。絶望の中いた8歳の少女。その少女にイエスキリストが出会ってくださった瞬間だったのだと。チルはこの時を境に泣かなくなったようですが、それは諦めからではなくむしろその逆で自分は孤独ではない、どんな時も自分と一緒にいてくれる存在がいるという確信と希望を見出したからでした。

チルの人生はその後も大変苦労の多いものでした。身売りされた先で成長したチルは家の主人のいうままに子を持つことは叶わない結婚をさせられました。また沖縄戦で母親と兄弟を亡くし孤児になった妹を引き取り育てました、地元で40年以上にわたり食堂を切り盛りしながら生計を立て閉店まで休むことなく厨房に立ち続けました。時々食堂のことを懐かしいと話してくださる方々に会うと本当に嬉しそうな笑顔で昔話に花を咲かせていました。

チルは戦前から信仰を持っていました。教会に行くことは許されませんでしたが、はっきりと神様の存在を確信していました。ようやく自由に教会に行けるようになってからは、喜びが溢れ出るという言葉を体現するかのごとく礼拝に出席していたことが懐かしく思い出されます。

また、周囲の人には熱心に伝道し、特にかかりつけの病院へ行く度に、看護師さんやスタッフに「わんは神様を信じて本当に幸せ。あんた達も神様を信じて幸せになりなさい」と熱心に語りかけていました。

晩年通っていた神愛バプテスト教会の饒平名長秀先生はチルのことをいつも気にかけてくださり「チルさんは天国に行くのではないですよ。もう、すでに天国にいますから」と微笑みながら仰ってくださったことは今でも忘れられません。

チルは2022年11月19日、103歳という人生を終え召されました。最後まで、自分の人生から逃げず、喜びも苦しみも受け入れ、キリストと共に自分の人生を走りぬき、祝福の内に全うした見事な生涯だったと思います。